

も此爲我身を傷むるやうの事ありとも、我つとめのためにたほ
る事なれば少しも悔む事なし、と何とはなく語られしことの
ゆくりなくも言葉の如くなり給ひぬ、なほかゝまほしき事さば
なれど胸せまりて筆とめぬ。

文展にて

けい子

思ひ出は愁しき秋をここに又捧げられつる花に泣くかな
なき人を忍ぶが岡に秋訪へば散り残りたる紅葉傷まし
なつかしき都の秋も來て見れば愁しき風の吹すきむかな

春子

忘れえぬ日はいつしかにめぐり來てまた新たなるかなしみ
のます

いたすらに涙ますなりいとし子が手向まつとてつくる花輪
の

畏友大下氏

藤村知子多

予、遇、酒匂なる別邸より歸り、其の夜、意外なる悲報に接せ
り、舊友大下氏の訃、即ち是れなり。聊予か知れる所を記して
以て、哀悼の意を表せんとす。

予、大下氏と、畫友として、相知りてより、茲に十七八星霜。
明治二十六年頃なりけん、予は始めて畫に志し、當時、中丸塾
と云ふに入塾せり。大下氏、先輩として此の塾に在り。而して
予の入塾せし當時は、氏の指導を受けたること多々なりき。

氏と相知り、久しからずして、氏の尊父逝去せらる、即ち氏は
家業の傍ら繪畫を研究せられ居たり。後一二年にして當時眞砂
町にありし家の家業を處理し、本郷追分町に新築せられ、茲に
引移られしも、又久しからずして、家世上の都合により、同邸
は予が引受くるに至り、氏は同番地なる宿屋に下宿せらる。

此の時、始めて氏は全く畫生として、専心研究に其の身を委
ねらる、氏と共に予が、郊外寫生など試みたるも多くは此の時
なりき。其の後現今の駒井町に新居を卜せられ、三十七年、予
が佛國より歸朝して、氏を青梅の寓居に訪づれし時は、氏は全
地の有志と共に水彩畫の研究、並びに其の普及に盡瘁せられ居
たり。後ち更に春鳥會を起して、みづゑを發行し、廣く水彩畫
なるものを社會に紹介し、進むで又日本水彩畫會を設けて、大
に子弟養成に勉め、已に其の門下に數多の秀才を出せり。氏は
實に眞面目且熱心なる。水彩畫研究並びに其の普及の急先鋒を
なしたる、我が洋畫界のオーソリチーとして記すべきもの、今
や地方の中學生、小學生等に至るまで、普れく水彩畫の何たる
かを解するに至りしは、氏の努力大に與て力ある所たり。
氏性行謹肅、溫厚篤實、誠に畏敬すべきの人。氏今や壯年、將
に尙ほ爲すあらんとするの時、俄然逝去せらる。實に悼ましく
も亦惜むべし。今や秋色紅を添へて、氏の健筆を待つの時、君
逝いて歸らず。嗚呼、我が畏友、汀鶯大下氏。

維時明治四十四年十月中旬